

「ヤツデ」

廣瀬清一 事務局

気象庁によると、今年9月から11月までの全国の平均気温は、平年と比べて1.97度高く、統計をとり始めてからのこの120年で最も暖かい秋となったという。これを示すように、近所の染井吉野(桜)もかなりの数の花を咲かしていた。それでも12月以降は、例年並みの寒さになるという。

暖かな日が続いていたが、陽射しは弱まり、日中の時間が短くなってきた。いつの間にか木々の葉は赤黄色に変わり、葉を散らし始めている。

こんな中、ヤツデは一層緑を濃くして元気がよい。光沢のある大きな葉は、南国の雰囲気があり海外では観葉植物として人気があるが、日本固有の植物である。

学名は *Fatsia japonica*。Fatsia(ファツィア)は、「八手(ハッシュ)」の読み由来する。

名前は八手であるが、実際は葉の切れ込みは奇数で、たいていは七つ、九つ、十一などの奇数に裂けている。天狗が持つ羽団扇と似ているため、「テングノハウチワ」という別名が付いている。

江戸時代になるとしだいに庭木としても植えられるようになる。そして「千客万来」の縁起物として入口に飾られるようになる。

窓の外に白き八手花咲きて ころろ寂しき
冬は来にけり 島木赤彦

寒さが感じられる頃になると、しだいに固まっていた花芽は花径を伸ばす。

枝の先端から真っ直に伸びた白い花茎が枝分かれし、それぞれの花径に米粒ほどの白い小花が球状になって咲き、清楚な白い花のブーケのように変身する。

濃い緑の葉の上にたくさんの白い花が球状に咲く姿は、夜空にきらめく「花火」のようでもある。

花は、花茎の先端のものから咲き始める。花は両性花であるが、花をよく見ると雄しべが伸びた雄花と雌しべが伸びた雌花の2種類ある。雄花から雌花へと上部の花から順繰りに性を変えていく。こうして長期間にわたり花を咲かす。

雄花の花弁は白色で5枚。おしべも5本ある。雌花のめしべは、開花した直後は集まって1本に見えるが先端は5つに分かれている。



めしべの下部には、花盤と呼ばれる部分があり、ここから蜜が分泌される。暖かい日にはミツバチやハナアブ、ハエなどの昆虫が訪れにぎわう。

寒さの中、ヤツデには、昆虫たちにほんのり幸せな場所がある。

花ハッ手界隈の虫呼びにけり 笠井育子

花の香りは弱く、どこかとらえどころがない。ややワクシーな感じがする。嗅いだ後、鼻の奥に硬い粉っぽいスティッキーな匂いが残る。

パルファン サトリの大沢さとり氏は、「実際(匂いは)あまりないと思うのであるが、よくよくかいで見ると、ほんのり粉のような匂いがする」³⁾と表現している。

それでも昆虫はヤツデの花の香りをちゃんとわかっていて、集まってくる。「白い香り」といった表現がいいのかもしれない。

去年は、夏に枝の先端を剪定してしまったので花が咲かなかった。冬の昆虫たちには申し訳ないことをした。

参考文献

- 1) 中野進 『花と日本人 花の不思議と生きる知恵』
花伝社 2000年
- 2) 田中肇 『花の顔 実を結ぶための知恵』
山と溪谷社 2000年
- 3) 大沢さとり 『ヤツデ』 パルファン サトリの香り紀行
https://parfum-satori.hatenablog.com/entry/fatsia_japonica